

# FUEIKI

VOL.63



特集

ここからはじまる物語

片山康之さん



# 福武純子理事長

ありがとうございました



平成29年2月10日

福武純子理事長が亡くなられた。享年69歳。

3月21日にJホールにおいて

「故福武純子さん 感謝の集い」が開催され、約400名が参列しました。



森田潔さん（感謝の集い実行委員会発起人代表、岡山大学長（当時））



私たちに多くの力を与えていただいた福武純子さん、今もそばにおられて私たちを見守っていたらいいなと思います。感謝の気持ちを述べたいと思います。

2010年に純子さんは郷里岡山へ戻られました。当初から岡山を活性化したい強い思いを持たれており、許南浩先生（当時医学部長）とのご縁をきっかけに10億円の私財を岡山大学へご寄贈いただくこととなりました。

私が学長に就任し提唱した「美しいキャンパスの創造」にも大いに賛同いただき、純子さんにご紹介いただいたSANA A妹島和世氏、西沢立衛氏を学長補佐に任命し、プロジェクトが始まりました。

最初にJホール（Junko Fukutake Hall）の設計図をみたときは、我々の想像をはるかに超えたデザインに一同仰天し衝撃を受けま

す。

た。その時、「建物が人を呼ぶ力をもっているというSANA Aさんの言葉を信じましょう」と純子さんに言われて決断したことを思い出します。

そして、2013年にJホール、14年にはJテラス（Junko Fukutake Terrace）が完成し、市民の集う施設になったことは本当に感謝しています。

福武教育文化振興財団理事長としては、岡山大教育学部に寄付講座（国吉康雄を中心とした美術鑑賞教育研究講座）を開講いただく等幅広く応援していただきました。

私の学長任期6年間で振り返り岡山大学の広報誌で、お亡くなりになる10日前に対談をしたことは心に残っておりです。

「合理的で寛容でボーダレスな出会いの場、自由に愉快なコミュニケーションを誘発する場、セレンディビティ（思わぬ発見）を生み出す場を是非大学につくって欲しい。そして市民と大学の垣根のない学園都市に岡山がなつて欲しい」といわれました。

西沢立衛さん（SANA A代表）



私たちはこの純子さんの言葉を胸に今後も努力を重ねてゆきたいと思っています。福武純子さん 本当にありがとうございました。

このJホールを妹島和世と共同設計させていただきました西沢です。

初めてお会いしたのはかなり昔、私の設計した集合住宅を東京に見に来ていただく機会がありました。純子さんは、花のよう魅力があつて、分かりやすく話されるけれど、鋭いことも言われたことを今も良く覚えてい

その後、岡山大学での一連のプロジェクトに参加する機会をいただき、純子さんには様々な影響をうけました。Jホール、Jテラスの建築での定期的な会議では、常に自分だけでなくみんなの立場を考えて物事をすすめようとされている印象をすごく感じました。また、純子さんの魅力が中心にあることで、皆が一致団結して物事が進んでいる一体感を感じました。

純子さんの言葉は、いつも等身大で平易で分かりやすいけれど、はつとするような普遍性というものを感じています。純子さんはいつも、どうすれば世の中が良くなるのかをいろいろな形で考えられているように感じています。

純子さんの言葉をいくつも覚えていますが、垣根を越える交流、多様性への愛情、人間の力への期待など、その言葉に私は共感し影響をうけました。それらは個人の考えだけでなく、他人であっても共有できる思想といえるようなものだったと思います。

純子さんが残し、我々が一緒につくった2つの建築は、まさに純子さんの思想がそのまま建築になった、純子さんの思想そのものです。このホール、テラスに行く度に、純子さんの思いと一緒にいるという気持ち

をこれからも持ち続けたいと思います。

長いような短い時間で一緒に活動することができ、多くのことを教えていただき感謝しています。純子さん どうもありがとうございました。





## 石田篤史さん（公益財団法人みなでつくる財団おかも専務理事）



純子さんは、財団の活動だけでなく、個人的にも、私たちのような地域の若い人たちも応援されていました。

初めてお会いしたのは10年くらい前に、子ども達に対する金銭教育としてのイベントを企画運営した時でした。その後、2年半ほど前に、コミュニティ財団をはじめたとお話するとは是非話を聞かせてと声をかけていただき、助言や紹介をしていただき活動を広げてまいりました。

純子さんに最初に紹介していただいたのが、定時制や通信制の高校生のキャリア支援をおこなう認定NPO法人D×Pの代表今井紀明さん。また病児保育等で全国的にも有名なフーレンスの駒崎弘樹さんの応援もされていて我々との交流機会も設けていただきました。

私から純子さんに紹介したのは、地域の若者の可能性を育てる活動をしているNPO法人だつびの柏原拓史さん、また18歳選挙権問題等若者と政治をつなぐ活動をするユースクリエイトの原田謙介さんなどです。

純子さんは、団体の大小や有名無名に拘らず、その人が思いをもつて、活動をどんどんと拡げてくれるならば是非応援したいといつて積極的に僕たちの背中を押して下さいました。

いつも報告にうかがうと「それはいいですね、是非やりましょう」と、いい事をどんどんひろげましょう」と言われ、子ども達がきちんと未来や夢を描けるための場をつくりましょうと本当に心から共感して力を下さいました。

本当に感謝しても感謝しきれない思いですが、今日一緒に来ているメンバーとともに、いただいた思いを胸に岡山で子どもたちが私たちを含めて未来を描けるような活動をこれからもしていきたいなと思っています。本当に純子さんありがとうございました。

## 福武英明さん（親族代表）



感謝の集いにご参列いただき、また開催いただきました森田潔学長をはじめ関係者の皆様に、親族を代表して厚く御礼申し上げます。

母純子は平成29年2月10日、安らかに息をひきとりました。2009年頃からALS（筋萎縮性側索硬化症）という難病と戦っていました。次第に体中の筋肉が衰えるという

病気で、本人も大変不安で恐怖心があつたと思いますが、私たちに弱音をはいたりすることなく、最期まで強い人でした。

「私の人生はすごく良い人生だった。思い起こすことはない」と口にしていましたが、最後の8年間は、闘病中ではありましたが、母の人生の中で最も充実した時間ではなかったかと思う程力強く毎日生きておりました。

特に岡山に戻つてからは常々「岡山を良質な文化の育つ地域にしていきたい。良質な文化に子どもが触れられる、そしてそこで健やかに成長できる地域にしていきたい」と思いを実現すべく岡山大学、SANA Aさんらを中心に取り組み、最終的にはこのJホールやJテラスを完成することができたと思います。そして、何よりそのような活動を通じて、多くの方に新たな交流が生まれたことを母は本当に喜んでおりました。

また、石田様のように頑張つて世の中を良くしていこうという若い方々への支援も力強くやつておりました。亡くなる数日前にも新たなプロジェクトの支援をスタートしておりました。若い方々から定期的に事業の報告をしていただくことを私にもうれしそうに話しておりました。



## 須賀みほさん（東京藝術大学准教授）



「宵のサロン」は、純子様主催により私どもが実施してまいりました日本文化に関するイベントで、Jホール創立とともに始まり、昨日十一月の三周年記念の会で十七回を数えました。

会の名前は、ルネッサンスの頃に、画家や音楽家など芸術家や科学者、医学者、文学者とあらゆる分野の人たちがサロンの主のもとに集まって語り合い、刺激を与え合つて互いの想像力を高めたように、純子様の下で日本の文化を核に交流をもとうということから、純子様と一緒に考えさせていただいたものです。

日本文化、美術の楽しさ、面白さ、美しさを最新の研究成果とともに岡山の皆様方に伝えて欲しいとおっしゃる純子様の言葉は私にとりまして何よりも大きな励みでした。

純子様の面影を胸に、今年度の宵のサロンは5回シリーズで、東京芸大の現代美術家の先生方とともに、日本の文化と現代の制作という観点から開催したいと考えております。

## 花柳大日翠さん（日本舞踊家）



今日の「三番叟」という演目は初めて純子様にお会いした際にご覧いただいた踊りで、思い出深いものです。天と地と世のすべてのものに感謝し前に向いて生きてゆく祈りをこめた踊りで、純子様を思いながら踊りました。

本年12月23日には、生前、純子さまより踊つてくださいとお願ひされております。のJホールで踊る予定になっています。

福武純子さんは、2年前の6月、財団理事長就任時の挨拶書状に次のように記されました。

「私は、自由で愉快的コミュニケーションから新しいプロジェクトや夢が生まれ、それぞれの活動が有機的につながり、更に新しい活動へと展開していくことが大切だと思っています。岡山がそのような魅力的な未来を創造する地域であってほしいと願っています」

純子理事長は、その思い、願いをもって行動され、多くの方々にたくさんの勇氣、力を与えてくれました。図らずも感謝の集いでそのことを改めて強く認識した次第です。

「子どもたちのために もっといい地域を、もっと希望のある未来を」という言葉は、純子理事長の遺志として、私ども財団の活動に確実に引き継がれてまいります。今後とも宜しくご指導ご鞭撻のほどお願いいたします。

（公益財団法人福武教育文化振興財団）



## ここからはじまる物語

学校と地域がつながるための「場」として  
小学校にギャラリーをつくる

緑丘小地域学校

協働本部実行委員会

委員長／美術家

片山康之さん



活動を始めたきっかけについて教えてください。

**片山** 僕は緑丘小学校の卒業生で、当時は700名ぐらいの生徒がいました。現在は200名ほどで、随分、子どもの数が減ってきています。減少しているということは、これからの地域にとっても危惧するところです。友だちや住民が少ないということが起因して、交流の多様性というか、人との触れ合いや関わり合いが弱まっています。じゃあ、そういう中でアーティストとして自分は何ができるのかと。何をやるかを考えるときは、あえて専門性を持たせること、プロフェッショナルかどうか、ということを意識しています。その中で、交流の起点にもなるような、ある種の注目を集めるようなきっかけになるようなものは何かと考えているうちに、そうだギャラリーをつくらうとひらめきました。

小学校の中にギャラリーを作るという取り組みは、前例がありますか？

**片山** あることはあります。ただ、短期的なイベントで終わったり、スペースは作ってたけれど、今はほとんど使われていなかったりしています。

緑丘小学校ミドリギャラリーの立ち上げについて教えてください。

**片山** ギャラリーオープンまでは3年ぐ



ギャラリーの役割は何ですか。

**片山** 面白いのは地域の学校の中にあるということ。文化や芸術はその土地で発信されてこそ価値があると思っています。この緑丘小学校区という単位で何か新しい芸術活動が生まれてくれることが一番よい形だし、役割の一つです。

大事なのは地域に住む人たちの意識を変えることです。「アートギャラリーって何だ？」って考えてくれるだけでも違いますし、ここが入り口になってもっと広く様々な芸術や文化活動に興味を持ってもらえたらなと思っています。そのためには、それに沿うような、反応できるような企画をここでやっていきたいです。

子どもたちや地域の反応はどうですか。



**片山** 70年前のミシンを使うワークショップを婦人会の方にしてもらったのですが、楽しんでくれていました。子どもたちや先生方は「あそこ何？」みたいな警戒心が強くて、あの場所は何だろうかと、まだ根付いてない状況です。でも、そこで無理やりここはこういう場所ですよ、と言い切るのはいやめようと思っています。この場所は子どもたちにとって、地域の人たちにとってどういうところなのかを時間をかけて、じっくりみんなで作り上げるべきです。それができるのは地域の特徴だと思っています。

ギャラリーミドリの一番の強みは地域で





## 片山康之(かたやまやすゆき)

美術家

1978年倉敷市児島出身。倉敷芸術科学大学大学院芸術研究科美術専攻修了。岡山県美術展山陽新聞社大賞(2008)、岡山芸術文化賞準グランプリ(2009)、マルセン芸術文化賞(2009)、福武文化奨励賞(2016)。吉備高原学園高等学校講師、倉敷市立短期大学非常勤講師。2010年からクリエイターズラウンジ(2014年から一般社団法人)の活動を始め、2015年に吹上美術館を開設。緑丘小地域学校協働本部実行委員会 委員長。



運営することです。町内会とか婦人会の方に関わってもらっているというのが強みです。地域の人はいなくならないですから。岡山県外から来るアーティストに頼っていないことの強みも活かしたいです。

大学との連携はどうですか？

**片山** 倉敷市立短期大学の先生や学生たちに関わってもらっています。地元にある大学ですからつながりが濃いですし、大事にしたいです。先生方からは、こういうのをやりたいという提案もあるので、取り入れていきたいと思っています。服飾美術学科や保育学科があるので、芸術的なことだけでなく、子育てや心理学の先生を呼んでトークをしてもらったり、学生も何か子どもを使って論文を書

きたいとか、研究したいことがあれば、活用してもらってもいいし、アイデアはいろいろあります。学生は研究活動なので、大学のゼミの先生も応援してくれています。

ギャラリーミドリが接着剤になってお互いが高まっていくのは非常に面白い。

**片山** この間もおばちゃんがミシンを踏んでいると、バッグを作りたいという学生がやってきました。おばちゃんは「形だけ言ってくれば縫うよ」って。学生がデザインを考えて、おばちゃんが縫うということになりました。学生は一生懸命考えてきたのに、おばちゃんに「こんなん、どこにでもあるが」とダメ出しされたり、「あんたもつと考えて」と突き返されたりしていましたけど、それはそれで、またおばちゃんと学生の関わりが生まれています。

できあがったバッグは、いつか展示してもらおうと思っています。規模は大きいのですが、意味があることなので。

今後の活動はどのように考えられていますか？

**片山** 先ほどの話の続きになりますが、ここにミシンが置いてあって、たまたまやって来たおばちゃんがミシンで縫っている。それを見て、興味がある人が「私もやってみたい」ぐらいの自然発生的な規模のワークショップを考えています。それと、プロフェッショナルなワークショップやイベ

ントもやってみたいです。例えばダンスの平井優子さんとか、アーティストの展示をやったりとか。僕もお絵かき教室や陶芸教室などの従来型のワークショップだけでなく新しい形のワークショップのスタイルがここではやれそうな気がします。1日2人のワークショップを10日間するとか。ずつとある場所なので、焦ってあれこれ進める必要がないんです。無理やりやってしまうのは良くないし、徐々に広がっていくというのが望むところです。これから何十年もギャラリーがあるみたいなのがいいです。もつと言えば、将来的にはこの町、この地域がものすごい文化都市になればいいと思います。







文化は文化自身が持つ力で  
県境を越え、  
国境を越え、  
自由に行き来する

## 近藤誠一氏



## 近藤誠一 × 平田オリザ × 中島諒人



設立30周年記念「ここに生きる、ここで創る」フォーラム

## 「地域にこそ在る最先端」



設立30周年の節目となる

第6回のテーマは

「地域にこそ在る最先端」。

地域に在る文化芸術は

どのような意義と価値を

私たちにもたらすのでしょうか。

(2017年1月14日、

Junko Fukutake Hall)



「お互いを認め合い、自分自身も認めるような、他人肯定的かつ自己肯定的な開かれた心を養う上で文化は極めて大事です。国籍、ジェンダー、時代の流れや世代を超えて自由に行き来をしながら、そこでお互いに人生や社会の問題を考えることが重要で、それを可能にするのが文化の本来の力です。こうしたことを一般のひとに気付いてもらうためには、学校や家庭、社会それぞれが役割をもっていますが、その有効な手段となるのが演劇やアートだと思っています。こうしたことをすべて政府や公立学校にやれといっても難しいかもしれません。そこで劇団や民間の文化団体、中間団体が極めて重要な役割をもちますし、これからはその役割をどんどん増やし、社会がそれをサポートしていかなければならないと思います」

### 近藤誠一(こんどう・せいいち)

1946年神奈川県生まれ。東京大学教養学部教養学科卒、東京大学大学院法学政治学研究科中退。UNESCO(国連教育科学文化機関)日本政府代表部特命全権大使、駐デンマーク特命全権大使、2010年7月より2013年7月まで文化庁長官。退官後は、東京藝術大学客員教授、京都市芸術文化協会理事長、東京都交響楽団理事長等を務める。レジオンドヌール・シュバリエ章(仏)、ダネブロー勲章大十字章(デンマーク)叙勲、アカデミア賞(全国日本学士会)、瑞宝重光章(平成28年度)受賞。





## 中島諒人氏

演劇のいいところは、  
言葉のやりとりと、  
人の体に触れるということ



「障害のある人たちの演劇に関わって、僕も3年目、4年目ですが、始めはドキドキして体に触れることができませんでした。彼らにとっても私たちに触れるというのは抵抗があるし、障害者同士も抵抗があります。ちよつと押し合う場面などがあつたりします。プロ同士だと、それを受け入れて、互いの力の関係で、ちよつと押したり投げ飛ばしたり、突き飛ばしたりが普通にできます。相手が障害のある人になると、ちよつとした時に、パーンと突き飛ばすかもしれない、けがをさせたりするかもしれないという不安感で一杯になります。しかし触れ合い続けていくうちに、信頼関係や人間的なつながりが、新しい回路を開くという実感がわきました。これは演劇だけに限らないかもしれない、ダンスでもいいかもしれないけど、他者理解には体の重要性があると思います」

中島諒人（なかしま・まこと）

演出家／鳥の劇場芸術監督、鳥取大学非常勤講師、鳥取県教育委員、日本B&O委員会代表、公益財団法人舞台芸術財団演劇人会議理事

1966年鳥取市生まれ。1990年東京大学法学部卒業。2006年より鳥取に活動拠点を移し、鳥の劇場をスタート。主な演出作品として『天使パピロン』に来たる（作：F.デュレンマット）、『白雪姫』（グリム童話より）、利賀演出家コンクール2003最優秀演出家賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞（2009）、鳥取県文化功労賞（2015）などを受賞。

## 平田オリザ氏

今、社会が抱えている問題について  
考える題材を与えるのが  
劇場の役割



「日本では答えを与えるのが演劇の役割とされています。そうではなくて、私たちアーティストは今の世界をこういうふうに見ていますよ、今の世界がこうなつたのはこういうことが原因ではないですかと素材を提供しています。たとえば移民難民の問題を考える時に、『トロイアの女』を上演して、2500年前のギリシャ人は異文化、異文化との接触、侵略をどう考えたかというのを考えてもらうこと、それが劇場の役割だと考えています。そういう劇場についての認識が育つていればいいなと思うことだと思います。少なくとも大陸ヨーロッパでは、劇場や演劇祭の使命だというふうにかえられています。答えを与えるのが仕事ではなくて、市民の対話の場所として劇場は機能しています」

平田オリザ（ひらた・おりざ）

劇作家／演出家、城崎国際アートセンター芸術監督、こまばアゴラ劇場芸術総監督／青年団主宰、東京藝術大学O2推進機構特任教授、大阪大学COデザインセンター特任教授／四国学院大学客員教授

1962年東京生まれ。国際基督教大学在学中の1982年に劇団「青年団」結成。1995年『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞受賞。近年はフランスを中心とした各国との国際共同製作、ロボット・アンドロイド演劇プロジェクトなど先駆的な作品を多数上演。2016年度より岡山県奈義町の教育・文化のまちづくり監に任命される。





クニヨシをもっと知りたい！

氏名 國吉康雄(クニヨシ ヤスオ)  
英語表記 Yasuo Kuniyoshi  
※1931年の帰国時、  
新聞および展覧会での表記は「ヤスオ國吉」。

生年月日 1889(明治22)年9月1日 丑年  
出身地 岡山市中出石町(現北区出石町)

経歴(職歴) 画家(1910年代～)  
写真家(1920年代)  
アート・スチューデント・リーグ教授(1934～1952年)  
ニュースクール・フォー・ソーシャル・リサーチ教授  
(1935～1950年)

アン・アメリカン・グループ会長(1939～1944年)

全米美術家組合理事長(1947～1951年)ほか

生徒 ブルース・ドーフマン、ポール・ジェンキンス

マイク・カネミツ(金光松美)、マリソルほか

師匠 ケネス・ヘイズ・ミラー、ハミルトン・イースターフィールド

趣味 園芸、写真など

結婚歴 キャサリン・シュミット(1919～1932)、サラ・マゾ(1935～)

子ども なし

亡くなった日 ニューヨークにて死去(1953年5月14日) 胃癌

墓所 ウッドストック・アーティスト墓地

好きな食べ物 中華、BLTサンド、チーズお酒

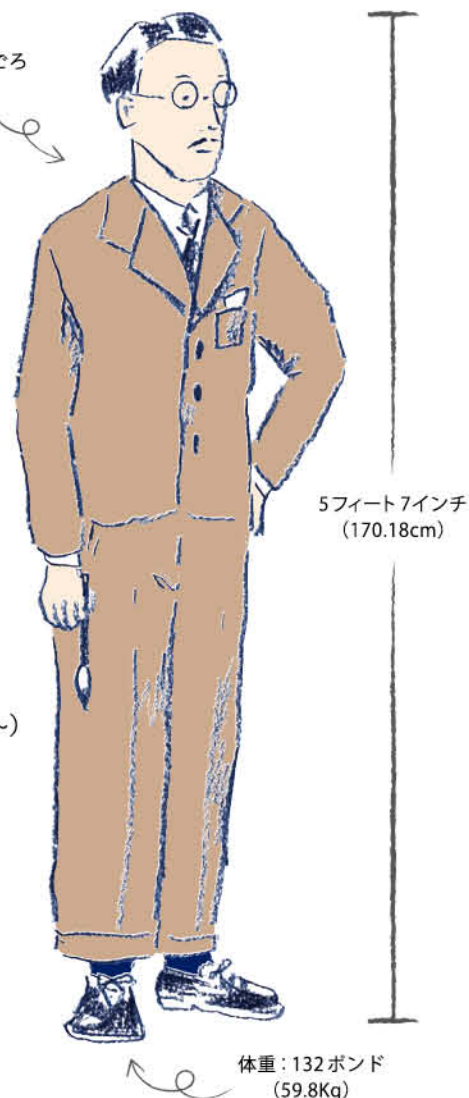
好きな歌 Jeanie with the Light Brown Hair  
(邦題「金髪のジェニー」)

好きな音楽 クラシック(チャイコフスキー)

友達 石垣綾子(文筆家)、ペン・シャーン(画家)

宗教 仏教

1940年ごろ



5フィート7インチ  
(170.18cm)

体重: 132ポンド  
(59.8kg)

岡山市出身の画家国吉康雄(1889～1953年)をテーマに  
美術鑑賞教育法を探究する岡山大学国吉康雄研究寄付講座は3年目を迎えました。  
クニヨシ祭やシンポジウム、展覧会などを開催してきましたが、  
改めて国吉康雄を紹介いたします。



### 国吉の軌跡 — 画家としてデビューするまで —

- 1889～1906年… 岡山市出石町で過ごす。
- 1906年… 16歳で労働移民として横浜港からカナダ(バンクーバー)経由西海岸(シアトル)に日露戦争終結の翌年到着。
- 1907～1910年… 西海岸では、日系コミュニティに身を寄せ、鉄道車庫の掃除やホテルのボーイ、果実の収穫期には果樹園を渡り歩くなど、お金を稼ぐために様々な仕事に就きながら、ロサンゼルス(ロサンゼルス)の公立学校の夜間部に通いはじめる。そこで芸術の才能を見出されて画家を目指す。
- 1910年… 21歳、ロサンゼルス(ロサンゼルス)のアカデミックな美術学校で芸術を学んだあと、ニューヨークへ移ってナショナル・アカデミー・オブ・デザイン、その後インディペンデント・スクール・オブ・アーツに通う。第一次世界大戦(1914～1918年)が勃発。
- 1916年… 27歳、画家としての人生を決定づけることになるアート・スチューデント・リーグに入学し、その後の4年間を学ぶ。1917年28歳、画家としてデビュー。



福武コレクションで  
一番年代が  
古い油絵

Landscape with Houses  
and Lake(1917)  
家と湖のある風景



福武コレクションで  
一番年代が  
新しい油絵

Mr. Ace (1952)  
ミスター・エース



# 「なに食べたい？」

灰原抄織・文



2度目の成人式を過ぎても、実家に帰省するとなると決まって母が私に聞いてくるのが「なに食べたい？」である。

私が幼いころ、祖父母と両親は食料品や酒、日用品を扱う商売をしていたこともあって、従業員やアルバイトの学生、時には取引先の営業担当のおじさんなど大勢で食卓を囲むのが常であった。遠方から来るゲストがお土産で珍しい食材をくれたり、近所の人が自分の畑からきゅうりや白菜を、旬になればとれたての柿やぶどうをくれたり、食卓はいつもにぎやかで華やかだった。

日頃の食事は仕事で忙しい母や祖母に代わり、お手伝いのおばちゃんや作ってくれていた。それは肉じゃがになすのみそ炒め、なますに白和え、切り干し大根の煮物など、白いご飯に合う、まさにおふくろの味であった。日常がこういう状況だったので、母の作るいわゆる和食の手料理を食べた印象は薄いのだ。

そんな忙しい母も、遠足や行事などの時のお弁当はきっちりと手作りしてくれていた。いつも好きなものばかりをリクエストするので、当然子どもの私にとって満足度は高かった。

ある時、小学生の私に母が「お弁当、パンでもいい？」と聞いてきた。当時、お惣菜や調理パンの販売分を自分で作っていた母は、ついでお弁当も、と合理化したかっただと思う。かくして完成

したお弁当は、たまご、ハム、ツナ、フルーツ、チーズのサンドイッチにいちごやオレンジが添えられた色目がカラフルで心が躍った。パンメインのお弁当など誰も持ってきていない中、サンドイッチ弁当はクラス中の脚光を浴びた。それから、クラスで「サンドイッチ」ブームに火が付き、クラスメイトたちもパンのお弁当を持ってくるようになった。当時はまだ珍しかった、海外で売られているようなかわいい柄の紙の容器に入ったパンのお弁当は、私の自慢の一品となった。

幼少期から食べるのが好きで、さまざまな食べ物に囲まれて育ち、多くの人が出入りする家で、その人たちと囲んでいた食卓が今の私の仕事の原点となっているのは間違いなく、振り返ってみて思う。

そして今回の帰省でも、「なに食べた？」の答えは、私のおふくろの味「手作りサンドイッチ」なのである。

## はいばら・さおり

広告代理店勤務などのOL生活の傍ら、フランス菓子教室で製菓を学ぶ。1999年、イタリア・トスカーナでの料理研修を経て、2005年よりタイ、マレーシア、韓国などのアジア各国でも料理を学ぶ。ワインやテーブルコーディネートを取得したことで、2007年料理教室をスタート。「食」を軸にしたコミュニケーションの場を創造すべく、料理教室とケータリングパーティー、フード&テーブルコーディネートとして活動中。

## 「母からの手紙77通の思い」

「どんな家族でしたか」と聞かれたら「とても仲のよい家族です」と迷わず答えます。高齢出産で生まれた子どもだったし、一人っ子だったこともあって、私がやりたいと言ったことは何でもさせてくれました。小学生から習い始めたフルートもその一つです。母はシンフォニーホールでクラシックコンサートがあれば、ほとんど連れて行ってくれました。美術館にも幼い頃から連れて行ってくれました。本物を触りなさい、持ちなさい、見なさいという母でしたから、学校でそろえる習字道具やリコーダーなども専門店を買っていました。当時はみんなと同じモノを持ちたくて仕方なかったのですが。

しつけには厳しい母でした。何かしていただいたときのお礼の電話やお手紙は子ども頃からさせられていました。今思うと、高齢だった母

は、生きていくために、社会にでたときに困らないようにと、厳しかっただのだと思います。

高校卒業後、フルートの勉強をするために渡仏したいと両親に伝えたと、父は賛成してくれましたが、母は反対でした。遠くても国内、ましてや海外なんて。身近に居てほしかったのでしよう。ずっと反対していた母ですが「私の人生なんだから邪魔しないで。私が決めるから」と言ったときには厳しい表情で「わかった」と承知してくれました。

そんな頃、母に大腸ガンがみつかりました。手術もしましたが、約1年後に亡くなってしまいました。大腸ガンだとわかってから母は、私に毎日のように手紙を書いてくれました。亡くなる前日まで日記のように、いろんなことを書いてくれました。ときには、イラストが描かれてあったり。電話で友達にモーニングコールを頼んだことを話すと「今日は少し注意してほしいことを書きます。奈緒子ちゃんはどう思うかは別ですが母親として言うておきたいです。夜遅く迄長電話して人に朝起こしてもらうなんて私の考えでは最低です。いつも言っているように自分の時間は自分でコントロールして下さい。プライベートの時間は自分自身でしっかり管理してほしいのです」と手紙には書かれていました。こういうことは立派だったよとか、こういうことは絶対したらだめだよとか、人生で気を付けて欲しいことなども綴ってられています。今でも、母に会いたくなったとき、読み返します。私の宝物です。

結婚して、ふたりの娘ができました。気が付けば母のように本物を聴かせたり、見せたり、触れさせたりしている自分がいます。(談)

## こそだて、おやそだて



病院にて(昭和60年)

## 三尾奈緒子 (みおなおこ) フルート奏者

1985年岡山市生まれ。5年間のヨーロッパ留学後、24歳のときに地元岡山県に戻り演奏活動を積極的に展開。その場の空気を受け止め、自身が持つ表現の中から最良の表現を選び取る...その場でしか味わえないサイトスペシフィックな演奏空間の創出に優れた才能を発揮されている。2012年(第13回)福武文化奨励賞。



## FACE

デザインストラテジスト／アートディレクター／デザイナー

### 佐藤 豪人 さん

「デザイナーの大きな役割として、言葉や想いをみえるように視覚言語へと翻訳するという仕事があります。例えば、ラスコー洞窟の壁画。旧石器時代にクロマニヨン人が狩猟の様子などを伝えるために洞窟に端的な絵を描きました。世界最古の芸術といわれていますが、僕はデザインのはじまりとも考えています。これは、情報を整理して伝えるという現代でも変わらないデザイン思考です。デザインはコミュニケーションのために在って、伝えることがなければデザイナーも必要ありません」と話しはじめた佐藤さん。小さい頃から描くことが好きで絵や漫画に熱中してい

「デザイナーの役割ってなに？」  
30周年記念誌『and F』と財団のWEB、フォーラムの広報物をデザインしていたという佐藤豪人さんにデザイナーの仕事について伺ってきました。

た。美術の成績はずっと良かった。小学校時代、足が遅いという劣等感をなくしてくれたのも絵だった。休み時間になると「絵を描いて」と友達が集まってきた。自分の居場所を作るのに絵が必要だった。高校の進路に悩んでいるとき、美術が学べる総社南高校を母が勧めてくれた。デッサンの授業では、うまく描けなくて悔しかったが造形の基礎を学ぶことができた。

20代前半で現在のデザインスタジオの前身を設立。いわゆる食べれない時代が続いた暗黒の時代だったと振り返る。アパレルや飲食店で接客のアルバイトをしながらそれでも「デザインとは何か」を考えてばかりいた。しかし、接客の仕事はヒアリングやプレゼンテーションに必要な「聞く」や「話す」の力になった。デザインの仕事も少しずつ増え始め、人の縁や業界内の受賞・入選をきっかけに世界は広がった。そして、仕事を通してデザインだけではなく、マネジメントとは何か、経済とは何か、コンサルタントとは何かも勉強していった。

全国にクライアントがいる佐藤さんですが、地域の仕事は、それぞれが主役で顔が見えるところが面白いという。現在は企業と顧問契約を結びデザインマネジメントもしている。色や形をデザインするだけではなく、商品企画やブランドの確立、組織体制などにも関わっている。「情報を整理したり編集したり、考えることが好きだし、完成したモノを見るのも嬉しいです」と笑顔になる。苦労の時代を経た今、大晦日には「今年もデザインでご飯が食べられました。ありがとうございます」と手を合わせて感謝している。

今後は、多種多様なクリエイターがいる中で、クライアントとの間でデザインのディレクションさらにできればと話す。その中で、若いデザイナーとも一緒に成長できたらと夢を語る。

佐藤さんをはじめとするデザイナーたちの活躍が、岡山を魅力ある地域にデザインしてくれることを楽しみにしています。

佐藤豪人(さとうひと)

1985年岡山県生まれ。デザインストラテジスト／アートディレクター／デザイナー。2007年「ヒト・モノ・コトを、ポジティブに結ぶ。」を理念にデザインスタジオを設立。デザインマネジメントの観点でブランディングを主軸としてコミュニケーションの創造を目指している。県内外の法人・個人・事業・商品でブランディング実績多数。また、デザインはCI/VI・広告・パッケージ・サイン・Webなど領域を横断して活動中。公益社団法人日本グラフィックデザイナー協会(JAGDA)正会員。日本パッケージデザイン大賞入選、日本タイポグラフィ年鑑入選。  
HIDETO SATO DESIGN <http://hidetosato.com/>

## その① …… 財団の助成について

私たちの団体で助成の申請を考えているのですが、福武教育文化振興財団は、どのような財団ですか？

財団が所有するベネッセホールディングス株式の配当金を主財源として活動している民間の助成財団です。岡山県内での教育文化活動に対する支援を行い、人材育成と地域の発展に貢献することを目的としています。企業の利益や行政の公平性にこだわらない、創造的な活動や新たな取り組みへの助成をしています。

どんな活動が対象ですか？

岡山県内で行われる教育・文化活動が対象です。特に活動を「はじめる ひろげる はっしんする」ときに活用すると有効です。

教育と文化のエッセンスが必要ということですね。

助成金とは目的を達成するための資金です。財団には必ず目的があるので、その目的に合わない活動はどんなに良い事業でも対象になりません。申請する場合は「助成金」の性格や特徴を理解することが大切です。

団体が困っているから、資金が足りないから助けてくれるお金ではないのですね。

募集期間はいつですか？

公募期間は毎年12月1日～1月31日、教育活動助成と文化活動助成の2つの分野で活動する団体・個人を募集しています。11月には公式ホームページから申請書がダウンロードできます。

これまでの実績は？

設立31年目を迎える2017年までの累計は4300件、総額15億円の助成金を拠出し、県内の様々な団体や個人が活用しています。

どのような活動に助成していますか？

平成28年度でいえば、教育活動助成は、中高生が地域の大学生や保護者、社会人と交流するキャリア教育授業の実施するNPO法人だっぴの活動、特定非営利活動法人ポケットサポートによる慢性疾患を抱える子どもへの学習支援を行うための大学生スキルアップ講座などがあります。文化活動助成は、演劇を通じて地域社会に「老い」「ボケ」「死」を受け入れる新しい文化の創出「老いと演劇」OiBokkeShiの活動やみるを楽しむ！アートナビ岡山の対話による芸術鑑賞、西奉還町武士マルシェ実行委員会の奉還町の歴史と文化をテーマにした劇場型マルシェなどがあります。

いろいろなジャンルの団体がいますね。

助成財団には目的があり、助成先の団体はその目的を実現してくれるパートナーです。お互い自分たちのもっていない手段(人・ノウハウ・現場)や強みを持ちよることで目的達成を目指して事業を行っています。

助成申請を考えてみようかな。

今回は「助成金申請書」作成のポイントをお伝えしますね。

※2017年度(平成29年度)の助成対象者や過去の助成対象者につきましては、WEBの応援した助成対象(<http://www.fukutake.or.jp/ec/joseilist.html>)をご覧ください。  
※参照:『助成金応募ガイド』の活用(公益財団法人助成財団センター <http://www.jfc.or.jp/>)

教えて！  
財団





## Cover Photograph



©Hiromi Honda

### 田中園子

Tanaka Sonoko

写真家/1975年東京都生まれ、岡山市在住。関西学院大学社会学部卒業。2017/アートフェア東京2017 (gallery A-zone booth)、第10回I氏賞選考作品展、2016/「SUMMER 2016」(gallery A-zone)、2014/「PHOTO」(gallery A-zone)、APAアワード2013写真作品部門入選、「NTMY ISSUE.2 EXHIBITION」(青森県十和田市現代美術館 Towada Art Center)、2012/岡山県美術展覧会写真部門奨励賞、2010/写真集「3DK」刊行

表紙写真：新品のランドセル(2008)

入学式を終えて退場する時に、たくさん母親の中にスーツ姿の父を見つけた。父が来てくれたという誇らしい気持ちと、自分だけがみんなと違うようで気持ち悪い気持ちとで、教室へと戻った。

帰り道は雨だった。色とりどりの傘とハイヒールを見つめながら歩いた。自宅に近づくにつれて人は減り、最後は父とふたりになった。途切れない車通りを待つあいだ、「今日はやけに車が多いなあ」と傘の上から張りのある父の声が聞こえてきた。しっかりと父の手を握り、黙って見つけた横断歩道はいまでもはつきりと覚えている。雨が虫のように跳ねていた。

## 入学式

田中園子

小学校の入学式は父が来てくれた。35年も前の話だから、当時は父親の参列はめずらしかったと思う。いつ告げられたのかはわからないが、家でひとり遊びをしている時に「入学式はお父さんが行くからね」と言われた。その頃は体調が思わしくなかったで「うん」とだけ答えたように思う。薄暗い居間の奥にいる両親の姿をぼんやりと覚えている。

## Editor's Column

■亡くなられた理事長、福武純子さんのご自宅には月に1度、財団事業の報告や相談に伺っていました。。いつも、にこやかに話を聞いていただき、最後に出される季節の和菓子を楽しみにしておりました。亡くなられる2日前も、従来と変わらず真剣にご対応いただきました。■数年前から「病気のことは、誰にも隠していないし、最後まで自分らしく生きたい。子ども達には迷惑かけず、彼らのやりたいことやって欲しい」と言われていました。病氣と闘いながらも、本当にいつも凛とされていたお姿でした。■純子さんの遺されたJホール、Jテラス。「岡山が地域の人々と大学の垣根のない魅力的な学園都市」を目指すシンボリックな存在として、これからも人々が交流し、輝き続けることを祈るばかりです。財団活動も、岡山が更に魅力的な地域になるよう、純子さんの話を反芻しながら、じっくりと取り組んでまいりたいと思います。純子さん 本当にありがとうございました。合掌。(O)



公益  
財団法人

福武教育文化振興財団

人づくり、地域づくりを応援します

〒700-0807 岡山県岡山市北区南方3-7-17  
株式会社ベネッセコーポレーション本社3階  
TEL:086-221-5254 FAX:086-232-3190  
URL: <http://www.fukutake.or.jp/ec/>  
E-MAIL: [eczaidan@fukutake.or.jp](mailto:eczaidan@fukutake.or.jp)

機関誌 **不易** FUEKI vol.63 2017.5.25

編集・発行:

公益財団法人福武教育文化振興財団

制作: 株式会社吉備人

デザイン・イラスト: タケシマレイコ

印刷: 株式会社三門印刷所